

今回は選評でなく

佐藤 信

選考委員の顔ぶれが一新した。当然だが、議論の内容もこれまでと大きく変わった。選考会が始まって間もなく、これからの選考会での自分の立ち位置について発言した。「ぼくの役割はやっかいな爺さんかな」というような内容だったが、まあ、わざわざつけ加える必要もない（少なくとも、爺さんなのは見ればすぐにわかる！）、言わずもがなのひと言だったかも知れない。

しかし、その主旨だけは、最後まできちんとまもらなければいけなかった。ところがそれが果たせなかった。たとえ議論が徹夜に及ぼうとも、頑として筋を曲げない頑固さなくして、何が「やっかいな爺さん」だ。最終選考に残った九人の候補者には、本当に申し訳なく思っている。中でも、佳作受賞の田中浩之さん、山本正典さん、横山拓也さんの三人には、「おめでとうございます」の祝辞とともに、ひと言「ごめんなさい」をつけ加えておかなければならない。

賞を選ぶまでの議論、そして公開選評会でのコメントを通して、選考委員は候補作に対して、歯に衣を着せない率直な感想を述べ合う。とりわけこの賞のように、委員全員が、現役の劇作家、演出家である場合、それぞれの多様な演劇にたいする考え方の（時には絶対に折り合いが付きそうにない）違いによって、意見が大きく割れるのは当たり前だ。自説を開陳し、大げさに言えば自分の創作活動をかけて、一作一作、厳しく評価し、論評するのが、選考委員に課せられた役割だ。

そしてもうひとつ、選考会にはOMS戯曲賞の受賞者（作）を選ぶという役目がある。作品評価の議論と賞選考の議論、ふたつの議論はかならずしも直線的には結ばれない（というよりも、大抵はそうだ）。創設と同時にこの賞の選考委員の席に加わり、何年かの経験を過ごすうち、自分が担っている役目について、そのように整理し、自覚するようになった。選考会の席上でこれまで何度かそれを発言し、メンバーが大きく入れ替わった今回の委員会でも、議論の途中、「受賞者（作）決定は、絶対評価というよりは相対評価で」という自説を述べた。

だったら、それを貫き通せばよかったのだ。真夜中になっても、賞決定まで選考をつづけると机にしがみついて駄々をこねる石頭とか、「これだけ議論したのだから、三人の実力はわかった。自分の中では次点だが、今回の受賞者はこの人ね」と、突然、態度を豹変させる老獺とか、「やっかいな爺さん」としての振る舞いはいくらかあったはずだ。

いつもの通り、周到にして懇切丁寧な九鬼葉子さんの選考経過レポート（OMS戯曲賞ならではの値打ちのひとつ）の中でもあきらかなように、議論の終盤、膠着状態がつづく場の空気に付度して、「今回は大賞なし」の口火を切ってしまったのは、誰あろう「やっかいな爺さん」を標榜していたはずのぼく自身だった。つまり、佳作三作という前例のない今回の結論について、そもそもの責任はこのぼくにある。選考会、公開選評会を終えたあ

と、いつもとは違う、何とも忸怩たる思いが後に残った。

埒もない反省文をいつまで書き連ねても仕方がない。発足以来、OMS戯曲賞のいちばん重要な価値を担ってきた、毎年、作品を寄せていただいている応募者の皆さん、そしてこれまでの受賞者の皆さんに対して、役目を果たせず申し訳ないという気持ちを、せめてひと言、お伝えしておきたかった。ほんらいならば選評を載せるはずのこの場所に、このような文を寄せるこの行為もまた、毫碌ゆえの不始末としないことを願っている。